ホルモン分泌過剰を示す副腎腫瘍の存在を明らかにすることができる症例を認めた。

31. 種々の薬物に対して過敏症を呈した高年発症のSLE の1症例

中本裕美，中島一格，大久保修一
（山梨県立中央）

77歳時に抗結核療法開始後，INH，RFP，SM に対して過敏症状を呈し，休薬。その後，INH の減感作療法を開始したところ，SLE を発症した。ステロイド療法施行し，症状，検査値の改善みられたが，PAS により，SLE 症状の再燃をみた。また経過中，エナラプリルにて無顆粒球症を来した。DLST にて，INH，SM は陽性を示した。抗結核薬投与が，SLE の発症に関与したと思われる興味深い1例であった。

32. 確定診断が困難であった消化管出血の2例

根津雅彦，鈴木　英孝，小島　聡
渡辺桂子，大久保裕司，岸　幹夫
笠貫順二　（横浜労災・消化器科）

今回我々は診断に苦慮した若年の下部消化管出血2症例を経験した。1例は直腸潰瘍からの大量出血によりショックを来した直腸粘膜脱症候群の稀な症例であった。他例は腹部血管造影，核医学的検査にて negative study であったが，小腸造影所見よりメッケル憩室を出血源と診断し得た症例であった。臨床経過及び診断過程において上記2例はきわめて示唆に富む症例であったため報告した。

33. 当センターにおける狭心症例の検討

宮本禎浩，大石嘉則，松野公紀
小倉武彦，三上雄路，酒井芳昭
石橋　巌，角田興一
（千葉県救急医療センター）

救急医療センターでは急性心筋梗塞と狭心症を診療対象とすることが多いが，1992年（1年間）にみられた137例153件の狭心症に対しておこなわれた検査と治療について評価してみた。冠動脈造影等の結果，保存治療としたものは凡そ半数であったが，71例に PTCA が行われ，6例は初期不成功となり，バイパス手術が4例におこなわれ急性冠閉塞で1例が死亡した。Interveneional Treatment の実状について報告する。

34. 頸部動脈系，脳循環動態の評価　圧，流れ，血管機能，抵抗による関数関係

白井厚治，竹内光吉，丸山憲一
長谷川元治，高山吉隆
（東邦大・臨床生理機能学研究室）

頸部動脈系を起点とする脳循環動態は，血圧，流量，末梢抵抗により解析されてきた。我々は血圧について対数関数1nPs/pd の概念を適用，循環動態因子として，血管機能 D/ΔD，固有血管機能 $\beta = Ps/pd \cdot D/\Delta D$ を導入し新しい循環動態関数式を試案した。これにより，固有血管機能 β 小の時，圧に変動があっても血流が保たれること，β 大の時，1nPs/pd に依存して，血流は変化し，循環不全をきたしやすい動態となることが分析された。

35. PTCA 後の再狭窄におよぼす因子の検討

吉村直樹，石井　敦，千葉隆一
西出敏雄，松島保久（松戸市立）

PTCA 後の再狭窄におよぼす因子について検討した。対象は狭窄度が50%以下に改善した Successful PTCA 125例で，3カ月後に CAG による re-study を行い，再狭窄の有無を評価した。regression は5例（4%），PTCA 拡張時の25%以下の再狭窄は86例（69%），26%以上の再狭窄は34例（27%）認められ，良好な成績を得た。PTCA 施行時の各種危険因子（高血圧，糖尿病，高脂血症，肥満）と再狭窄の程度には有意な関係は認められなかった。

36. 当院における外国人診療の問題

熊野浩太郎，渡辺紀彦，堀江美正
松本　功，小方信二，尾世川正明
松岡祐之，横田　仁（成田赤十字）

成田赤十字病院は空港に近接して立地するため外国人診療についていくつかの問題があると考えられ，これを過去5年にわたって分析した。当院の特徴として空港やホテルなど出入国に関連した入院が80%を占めており，そのほとんどが救急疾患であった。そして急性期の症状がおちついた時点ですぐに帰国となるのだが，中には病状不安定のまま帰国する場合があり，その際の応対の問題があり，最近は医療搬送会社に依頼することが多い。